ふるさとの風
～長月～

朝夕に心地よい涼風を感じるようになった。
草木に降りた露が白く見え始めた。
夏から秋への移ろいのこの時期…、二十四節気で白露という。

～ 陰気ようやく重なりて 露こごりて白色となれば也 ～　　— 暦便覧 —

九月（ながつき）になれば…　— 神都の画人 伊藤小坡（しょうは） —

古来、四季が美しく変化する日本に住む人々は、折々の季節を感じる繊細な
感性を自然に投影させ表現する術を身につけてきた…。

～ 九月（ながつき）になれば、紅葉むらむら色づきて、宮の御前（おまへ）えもいはずおもしろし。
風うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋（ふた）に、いろいろの花 紅葉をこきまぜて、こなたに奉らせたまへり。～
— 源氏物語　少女（をとめ） —

源氏物語…、秋好（あきこのむ）中宮が紫上へ贈る紅葉を集めている場面である。秋好中宮は六条御息所の忘れがたみ…。春夏秋冬それぞれの四季を象徴した４つの町からなる六条院で紅葉美しい秋の町のあるじである。
作者紫式部は六条御息所とその娘秋好中宮に、斎宮女御徽子（よしこ）女王と規子内親王の生涯を重ね合わせたのだといわれている。

秋の風情を何よりも好んだ秋好中宮…。

源氏物語の世界に心惹かれ、その華麗な姿を絵具で表現した女流画人が伊勢にいた。伊藤小坡である。
「秋草と宮仕へせる女達」は昭和３年（1928）、帝展に出品した作品で、秋草に囲まれた秋好中宮と源氏物語に登場する７人の女性が描かれ、見るものはその平安貴族の典雅な様に魅了される。

またその翌年の作品「秋好中宮図」も源氏物語絵巻の研究の成果が生かされている。

伊藤小坡は明治 10 年（1877）宇治の猿田彦神社宮司宇治土公（うじとこ）貞幹の長女として生れた。
本名は佐登という。幼少の頃より古典文学や茶の湯に親しみ、伊勢の四条派の画家磯部百鱗に師事して歴史画を好んで描いていた。後に京都の森川曽文（そぶん）、谷口香嶠（こうきょう）の門に入り、研鑽を重ね画家の道を進む。
小坡の画号は谷口香嶠から受けたものである。

明治 38 年（1905）28 歳の時に同門の伊藤鷺城（ろじょう）と結婚し伊藤の姓となる。
画家としての小坡は大正４年（1915）第９回文展（現在の日展）で「製作の前」が初入選、以降毎年のように官展に力作を発表。上村松園に次ぐ女性画家として一躍脚光を浴びた。

代表作には「つづきもの」「ふたば」等がある。
また「琵琶記」大正 10 年（1921）はフランス政府の買上げを受け、ルクサンブール美術館に所蔵されている。

昭和３年、小坡は竹内栖鳳（せいほう）の指導を仰ぐようになる。この頃から作風に変化が現れ、身近な生活風景を描く画家から歴史画家・美人画家へと大きく転向していった。「伊賀のつぼね」「春日詣」はこの頃の作品である。

伊藤小坡の作品は明治・大正期の日常の生活感を主題にしたものと、昭和期の歴史風俗や人物を主題とした美人画に大別することができるが、一貫した描写から作り出される存在感のある作品は見るものを惹きつけてやまない。

昭和 43 年（1968）１月７日、伊藤小坡 90 歳の長寿を全うしこの世を去った。

旧参宮街道沿い、瓦屋根と白壁が美しい小坡美術館がある。
館内の庭園からは秋色に変わりつつある神宮の山々を臨むことができる。

～ 宮城野の　露吹きむすぶ　風の音に　小萩がもとを　思ひこそやれ ～
— 源氏物語　桐壺 —

秋風にゆらぐ萩の花から 銀の露の玉がこぼれ落ちていった—

- 郷土の画家三人展　（L723／キ）
- 神都画譜　（永井謙吾／編著　永井謙吾　L721／ナ）

図書館だより
2012 年 9 月号より